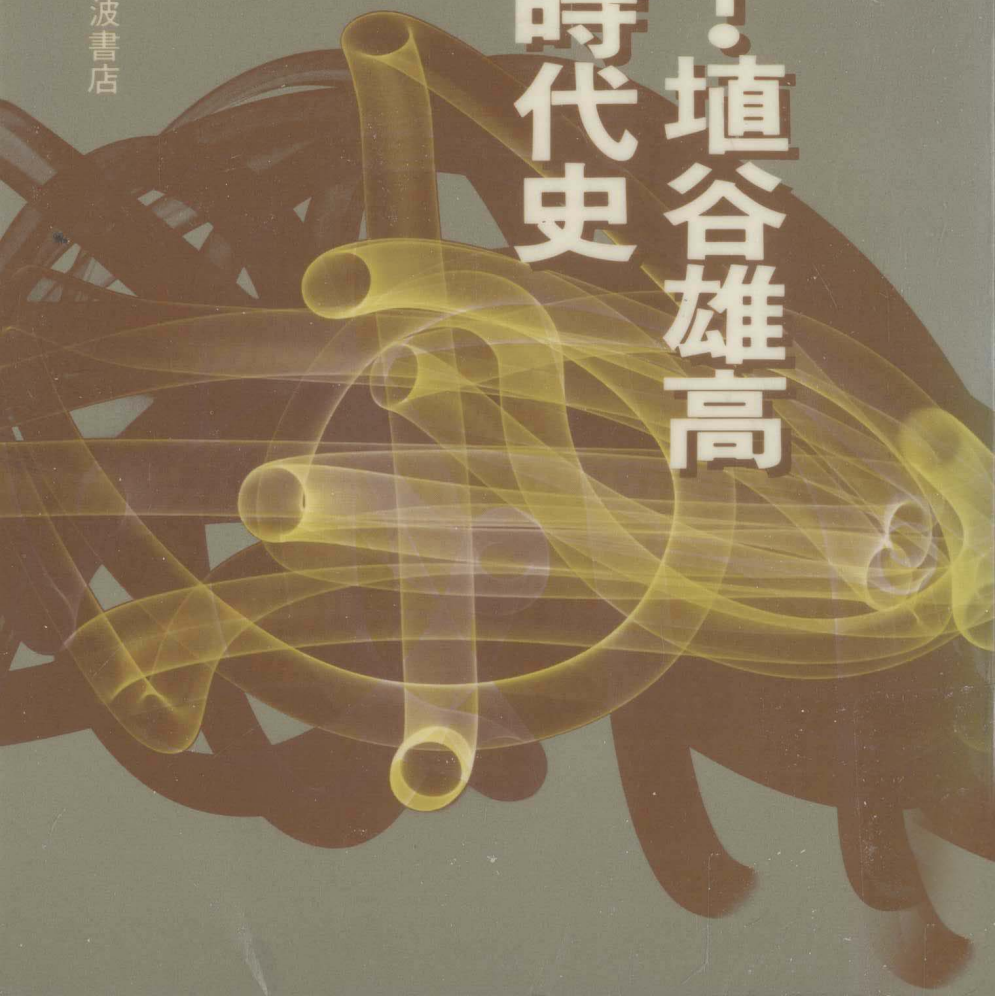
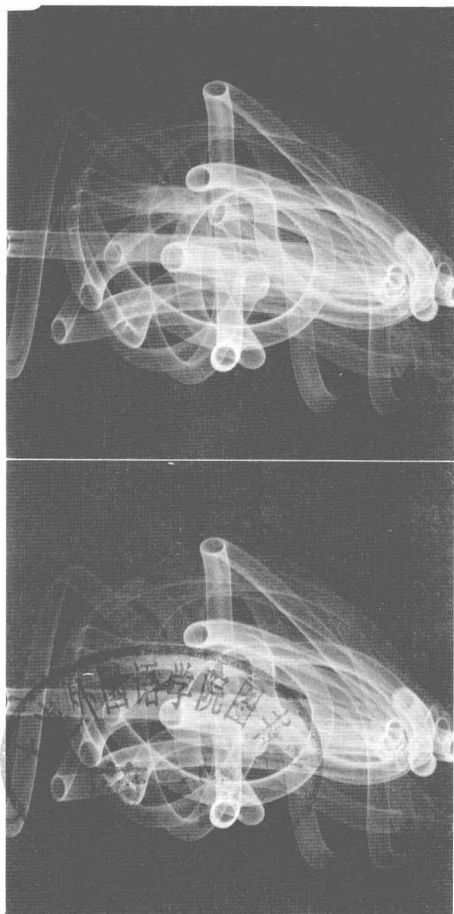


大岡昇平・埴谷雄高 二つの同時代史

岩波書店



大岡昇平・埴谷雄高 一つの同時代史



岩波書店

大岡昇平 壇谷雄高 二つの同時代史

一九八四年七月二三日 第一刷発行 ©
一九八四年八月一日 第二刷発行

定価二四〇〇円

著者

大岡昇平
壇谷雄高

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五
発行所 鐵岩波書店

電話 〇三・六千四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目次

I	意識の目ざめ……………	一
	意識の始まり(2) 原始の自由と差別(8) 善玉・悪玉——立川文庫体験(19)	
II	大正から昭和へ……………	二元
	映画と文学の混沌の時代(30) 大衆小説の人氣(34) ニヒリズムの芽生え(39) 左翼経験と演劇経験(43) 大正文学と外国文学(50) 革命と文学と結核(56) フランス文学の流行(65)	
III	文学的青春……………	七三
	ヒュネカーに導かれて(74) 科学と哲学の間(79) 「協力する三角関係」の中で(86)	
IV	子ども殺しと監獄体験……………	一二二
	子ども殺しと父親の秘密(112) 監獄体験と母のこと(123) 失敗続きの新聞記者時代(130)	

V 戦前から戦中へ……………二二七

結婚にいたるまで(138) 同人誌「構想」に加わる(142) ゼロ体験という原点(145) 『ファウスト』をめぐる(147) 開戦の前後(151) そして戦争(163) 短波で戦況をきく(167) 戦時中の神戸(173) 同人誌の仲間たち(179) 「新経済」のころ(188)

VI ミンドロ……………一九九

応召、フィリピンへ(200) 暗号兵の生活(205) 敗走、山へ(208) 捕虜収容所で敗戦をきく(215)

VII 『俘虜記』と『死霊』と……………二二三

『俘虜記』を考える枠組(222) 『俘虜記』の重要性(225) 戦後の文学の「大きさ」(228) 『死霊』をめぐる(231) 戦後文学誕生のころ(234)

VIII 「近代文学」の創刊と第一次戦後派……………二四三

敗戦直後の文学状況(244) 「近代文学」創刊のころ(254) 雑誌づくりの苦勞(261) 小林秀雄の『誤訳』事件(268) 赤字続きの「近代文学」(272) 戦後文学は終わったか(275) 同人百態(279) 「火の会」と「夜の会」(284)

IX 『武蔵野夫人』のころ……………二六七

独歩の『武蔵野』に挑戦(288) 会合の時代(292) スタンダールの「政治学」(295) 戦後作家

の意気込み(299) 米欧回遊(302) 戦後の最初の絶望期(306) 抵抗の伝統のない日本(312)
『武蔵野夫人』の魅力(315)

X スターリン・毛沢東批判……………三二

政治と文学の力学(322) 「国家の死滅」への裏切り(328)

XI 「聲」と「近代文学」の裏表……………三二

「聲」の同人たち(332) 大同団結した「記録芸術の会」(336) 異常児・荒正人(339)

XII 安保の時代とそれ以後……………三四五

安保と吉本隆明(346) 内ゲバ停止を求める(349) 「娘に引かれて」(351) 江藤淳の「先見の明」(353) 日本文化会議と小林・池島(355) 真空地帯行く磯田光一(357) 新しい占領史論への期待(358) サド裁判のころ(360) 戦後派びいき(364) 「大波小波」のエピソード(371)
『レイテ戦記』のころ(374)

XIII 『死霊』と戦後の文学……………三七九

「虚体」をめぐる(380) 時代の変化(384) 日本文学の低落(389)

XIV	三島由紀夫と花田清輝	三九五
-----	------------	-----

	三島事件の頃(396)	核兵器と国家(399)	文学的統一理論(403)	花田清輝と匿名批評(408)
XV	七〇年代後半	四二五		

	『少年』と『夢魔の世界』の頃(416)	芸術院会員辞退事件と武田泰淳(420)	梅崎春生と椎名麟三(423)	カトリック作家の増加(426)	『成城だより』の訂正二つ(428)	ペストセラーは災難(432)	『ながい旅』をめぐって(433)
--	---------------------	---------------------	----------------	-----------------	-------------------	----------------	------------------

XVI	近況をめぐって	四三九
-----	---------	-----

	区切りに生まれて(440)	衰弱する文壇(445)	妄想と言語観(449)	世紀と共に歩んで(452)
--	---------------	-------------	-------------	---------------

あとがき
索引

装幀(カバー・表紙・本扉) 万 膳 寛

I

意識の目ざめ



日本文学大賞授賞式(1976年,「死霊」受賞)にて

編集部

お二人は明治の同年に生まれられた全くの同時代人なわけですが、幼少年期の環境、青年期の体験、文学者として活躍される戦後期と、これまでの軌跡には、かなりの異同があるように思います。また、お仕事の面でも、事実関係を重要視する大岡さんと、ものごとを極端にまで拡大して思考する埴谷さんとは、その方法においてほとんど対照的ですからあります。しかし、社会や政治に対して没交渉であったり閉鎖的であったりすることが、すぐさま文学の芸術性を保証するかのような我が国の文学風土にあつては、批評精神のあり方において、お二人には強い共通性があるように思います。

本誌「世界」はお二人に、共に生きてこられた時代を回顧して対談していただき、大正・昭和史——主要な部分は戦後とその文学をめぐるものになると思いますが——の貴重な証言としたいと考えたわけです。個々の小さなエピソードが時代全体を物語るということもありますので、これまでに公表されていない、取って置きの話も数多く出

していただければと思います。

意識の始まり

大岡 埴谷は台湾生れで、震災の年に日本へ出てきた。十三歳で日本へきて異邦人だったっていうことは大きいと思うんだ。

埴谷 そりゃあるね。ぼくは戸籍上は明治四十三年一月一日生れというふうになっているけれども、実際は前の年四十二年十二月生れなんだ。大岡は三月生れだから九カ月兄貴だけ同時代ということで、後年の映画好きとか、探偵小説好きというのは、だいたい似たようなもんだね。これは花田清輝も同じだ。だからこれから共通の一つの時代というものを二廋人、つまり心臓が悪くて、足がヨタヨタの二廋人が思い出を語るっていう形で話すことになるわけだ。

ただ対照的なのは大岡の東京育ちというのに対して、ぼくは田舎、東京以外は全部田舎だけれども、その田舎のもっと外の植民地で育ったということだ。しかもその植民地

には、神社とか寺がないんだよ。あとで台湾神社というのが北白川宮の事跡を記念して台北にはできるけれども、ふつうのところにはないから、宗教性というものがぜんぜんないんだね。ぼくは非常に非宗教的に育っちゃったっていうこと、これも大岡とは対照的だ。

それから少し成長してきたら、こちらは青年になって左翼にいったけれども、大岡は非常にまれなる栄光に輝いた文学的環境に育っているわけだね。これはまた非常に対照的だから、そういう共通性と対照性を話せば、いちおうわれわれ明治の末期に生まれたものが、どういうふうに日本のなかで育ったかということがいわば鳥瞰できると思うから、できるだけくわしくいろんな話をしたいね。

大岡 宗教が台湾にはなくて、東京にはあるっていうけれども、おれの育ったのは東京といっても場末だよ。渋谷という、この東京の辺境というのは田舎でもなく、また東京でもないんだよ。神社っていうものは村だったら村の氏神があるでしょう。だけど、東京のそんなはずれへいくと、いちおう国家神道の鳥居と拝殿はあるというだけだ。

それからおれは同じ東京でも先祖代々の東京じゃないんで、両親が和歌山県から東京へ移住してきた人間ということがあるからね。だから東京が故郷だという感じはあまりないんだよね。それが大きいと思う。

台湾がぜんぜん故郷になりえないっていうことと、東京の郊外が故郷になりえないということと、これまた少し規模はちがう。その後おれはそのまま東京人になっちゃうんだけれど、そのあたりのちがいは、埴谷が東京へ出てきたあたりで話すとして、今日は子どものときの、意識の始まりだな、そういうところから聞きたいな。

埴谷 ぼくは新竹っていうところで生まれたんだけど、本当の赤ん坊時代だからぜんぜん記憶がない。そのころ親父は税官吏だったそうだけれども、後には台湾製糖というところへ入って、屏東というところが始まりなんだ。年時代の記憶はその屏東というところが始まりなんだ。

だいたい製糖会社というのは周りが耕地で、サトウキビ、甘蔗をつくって、それを搬入できるいちばんいいところに工場をつくるんだよ。そして会社自身が鉄道をもっていて、

サトウキビが成熟してくるとそれを貨車に乗せて、工場のなかまで引き込んで、ベルトコンベア式にクマデみたいなものでどんどん工場のベルトの上に乗せて、斜めになった

ベルトの一番上で断裁機というのかな、八方に刃がついた機械でサトウキビを切って、それをたちまち圧縮して汁にして、その汁をつぎに煮詰めちゃってね、ほんの数時間で砂糖ができちゃうんだ。はじめは赤砂糖みたいなもんだけれども、それを精製すると白い砂糖になる。でも、毎年十一月から翌年の一月の末か二月のはじめぐらいのたいの三カ月くらいだよ、工場が動いている期間は。あとの時間の全部は工場の機械は動かず畠にサトウキビを植えつけて育てる、そういうことをやっている。

大岡 つまり工業的な農業という環境が周りにあったんだな。記憶が始まってからだ、だいたい三歳から四歳ぐらいのことだろう。

壇谷 四歳ぐらいのときだね。

大岡 周りにサトウキビ畠の曠野がアメリカの西部劇みたいに広がっていて、そのなかにボツンと中央処理場があ

って、そこへサトウキビが集まってきて、それで製品になるという、つまり近代資本主義の工場の過程を最初から見て育ったんだな。

壇谷 うん。ただアメリカのそういう工場とちがうのは、末端では台湾人も使っているけれども、工場の内部にいるのはほとんど全部日本人で、周りの畠でサトウキビを植えているのはぜんぶ台湾人なんだ。一種の会社に属する小作だよ。つまり一生変化の生じない差別のなかで生きているわけなんだ。陸の孤島みたいに日本人だけが工場の周りに集団となって、その大きな大きな周辺に台湾人がずっといる。

子どものときはその差別があまりわからないんだけど、やがてだんだんわかってくる。もうひどい差別だからね。ぼくが日本人嫌いになったのは、子どものときに本当に日本人はこんな目茶苦茶なことをするのかと思ったことからきているんだよ。

人力車に乗って左にいけつていうときには、車夫の頭の左をコンと足で蹴るんだよ。要するに馬みたいな扱いだね。

それから、魚や野菜を台湾人が売りにくるんだが、それを主婦が値切るんだね。自分の言い値分の金しか渡さないんだよ。奥さん十銭ですといつてもいや七銭でいいといって七銭しか渡さない。どうしようもないわけだね。子どもながら日本人っていちばんいやなもんだと思ったね。

もつとも、年とって左翼になったら、植民地はどこでもおんなじで、イギリス人もフランス人もどこでも植民地では似たようなことをしているということがわかったけれども、子どものとき自然に入った感受性として、日本人は実にいやな人種だっている感じは、これは一生抜けなくなっちゃった。だから植民地育ちと東京育ちじゃがうと思うよ。

大岡 植民地住いの人間は、親類にいて、東京にいても少しは知っているんだけど、みんな上品でお金持に見えたよ。特権へ乗っかって稼ぎに稼いで、金ためて帰ってきて、満足しているんだね。

壇谷 それが大半だ。

大岡 にもかかわらずそうじゃない意識をもつ、ま、文

学者っていうのはそういう心やさしい人間だよ(笑)。

東京の場末にいても、たとえば、渋谷の道玄坂の、坂下に立ちんぼってのがいてね、車を押してそれで駄賃をもらって帰っていくんだよ。道ばたに、縄の帯をしめて立っているんだよ。

一日一善というのがそのころからいわれていて、おれも小学三年ぐらいの時だけど、立ちんぼのまねして知らないおじさんの車を押してやったことがある。そしたら、感心な子だねえとかなんとかいってさ、どうもありがとうといって一銭くれたかな。おれはこれは一日一善だから要らないっていったんだけどね。あとになってよく考えてみると、坂があまり急にならないうちに、いまの映画館のあるあたりで、急に車を横にして止めた。向こうは子どもに怪我さしちゃ面倒だって気が気じゃなかったのさ。それがわかったから、一度でやめちゃった。なんかはぐらかされた感じがあった、大人の世界に……。でもまあそんなコジキミみたいなのがいたことはいったんだ。台湾にはコジキミなかった？

壇谷 いたよ。

大岡 ま、そういうふうなことがあって、少し世の中に身分ちがいがあるということに気がつくんだよね。うちはおたくみたいな金持じゃないから、ひがみもあるしさ。

壇谷 いや、おれんちだって金持じゃないよ。おれのおじいさんは福島県の相馬藩だったんだけど、明治四年の廃藩置県で、田畑と山をもらって土着したんだよ。小高っていうところで、偶然、島尾敏雄とおんなじ村へ土着した。侍が四軒土着したのに、おれのおじいさんだけが怠け者で没落しちゃって、土地も山もみんなとられちゃった。そのとられたのを取り返すために親父は台湾にいったわけだ。これは孝行息子で、少しづつ取り返した。

大岡 だけど、台湾の官吏っていうのは、これはやっぱり特権階級だね。

壇谷 熱帯地手当てで当時は加俸があったからね。

大岡 それはもうちゃんとした身分だよ。

壇谷 だけど貧乏だからいったわけだ。だいたい台湾という植民地にいくなんてのはやはり内地で食いつぶされて

いくんだよ。

大岡 内地の人間から見ればそうだけれども、向こうへいけば、こんどは帝王だもの。

壇谷 そうそう。そういう二重性はあるんだ。あのころ台湾に日本人は僅か二十数万人ぐらいしかいないと思うんだ。台湾人は四百六、七十万人ぐらいいたけれど、とにかく絶対支配だ。反抗は絶対許されないんだ。だから日本人はしたいことをしていたけれど、しかも内地に対しては憧憬があった。日本全国が内地で、しかも、その中の東京となったら内地における最高の場所だったね。

ぼくは、松井須磨子がきてやった『復活』のカチューシヤを見ているが、そういう憧憬があるから、あ、内地からきた、ていうだけで見えるのだよ。要するに内地のなにかと肌で接触したいという感じがあるんだね。そういう憧憬と、それから台湾人に対する絶対の圧政の二重性があるんだ。ところが、ほかにも上山草人や山川浦路がきてやった『トスカ』の中に真っ暗闇のなかで拷問の場面があるんだよ。なにか闇のなかでガチャガチャ鉄の音がして、そしてヒイ

ヒイ悲鳴をあげるんだ。ほんとに恐ろしかった。人生の恐ろしさをはじめて知った恐ろしさだよ。

ぼくが四つぐらいのときに、内地から新劇がきたっていうんで、新しもの好きの奥さんが連れてってくれたんだけど、カチューシャの場合はなんとなく憧憬的なものを覚えて見ていたけれども、『トスカ』のときはほんとに恐くなっちゃってね。いわば人生の恐怖の初めての体験だね。

大岡 おれも「カチューシャの唄」は歌ったよ、小学校にあがる前にね。しかし映画とか芝居は、要するに悪いことを教えるから、行っちゃいけないってことになっていったんだよな。だから松井須磨子がカチューシャをやったって見に連れてってくれるなんてことは、おれにはなかったんだ。これが下町ならば、歌舞伎へ子どもを連れていったりすることもあったろうけれども、おれの親父は和歌山県からきた移住者であって、子どもを東京の悪に染ませちゃいけないというような考えがあったかも知れないな。

おれたちの生まれたのは明治四十二年で、四十四、五年っていったら大逆事件があったりして、世の中は暗かった。

貧乏だったし、そんな感じだった。

ところで、きみの生まれた新竹というと、これまた南のほうなんだろ。

壇谷 嘉義のそばで、中部になるんだ。北部は冬は雨期だから、台北のほうはわりあい冬は寒いよ。南部は夏が雨期だからこれは一月でも暑いね。ところが、その新竹てのはちょうどまんなかだから、台湾ではいちばん氣候がいいんだ。しかし、その生まれたところは記憶がない。だいたいサトウキビってのは南部が耕作地だから、工場というのはだいたい南部にあるんだよ。だからほとんど暑いところの記憶だ。

ほんとに冬でも暑くてね、一月一日から川に飛び込んで子どもは泳いでいるんだ、素っ裸で。そればかりじゃなくて、台湾では、特有な食べものに米の粉と書いてビーフン、実際コメの粉でつくったものだが、そういう食べものがあるんだけど、日本人のなかでいちばん好まれていてね、細君連中が集まってビーフンを食べる会みたいなことを見ると、この時も子どもは全部素っ裸にされちゃうんだ、

こぼすから。ぼくたちの時代はパンツなんてものはなかったから男の子も女の子も全部素っ裸だったよね。ほんとに原始そのもの。

大岡 いや、おれだってぜんぜんパンツなんてものはいてないよ。フルチンだ。女の子は腰巻してるけれど。

壇谷 あれは白木屋の大火以後だという話だけれどもね、パンツを女がはくようになったのは。

大岡 それはOLがはいたってことで、全部がはいってわけじゃあないよ。おふくろも姉貴もずっと後まで腰巻だった。おれと同世代の女の子はパンツはいたかな。そんな風俗の転換期にあたってたんだ、大正時代のおわりってのは新聞記者時代、鎗木清方にインタヴューしたら、昭和の方が風俗が安定して、描き易いって言ってた。おれたちは学校で読み書きを覚えるってことだった。大正の初期のことは知らないな。大正四年に小学校へ上るんだから。

壇谷 知らないね。

大岡 やっぱり中学校へ入ってからだな、色々なことを意識し出すのは。

原始の自由と差別

壇谷 風俗のことでもいい思い出したけれどもね、小学校へ入ってもぼくたちのときは着物なんだな。袴をはく子もいれば、はかない子もいる。しかし天長節なんかの祝祭日には必ず袴をはいて、しかも靴なんだよ。ふつうは靴なんかはかないんだけれどもね。

大岡 だからきみのうちはやっぱり金持だよ。おれは靴なんて買ってくれなかったよ。

壇谷 いや、おれだってそのときだけはくんだよ。

大岡 こっちは靴なんてでんで持っていない、袴は強制だったけどね。靴はいていくのは幼稚園に通ってる子でね、靴をはいてるやつはクラスで一番か二番のお金持の子だ。

壇谷 台湾はいくらか余裕があったんだ。

大岡 きみは特権階級の子だよ、だんだん聞いていると。

壇谷 台湾人に対しては特権階級なんだ。しかし、とにかく非常に純真な時代で、善悪の道德観念のの子どものときから教えられてね、ぼくも坂で前に車を重そうに引

いているやつがいます、必ずうしろから押したもんだよ。

そういう人は必ず押してやらなければならないとか、コジキがいたら必ず一銭やるとか、そういうふうに教育されちゃったんだ。

また事実、いまならいちいち車を引いて坂上がるなんてことはありえないんだ。トラックなんだからね。当時は人間の苦しみを直接に見ることのできる時代でもあったんだね。だから自然にそういう道徳が身についたわけだ。

大岡 きみのうちは内地では下っ端の官吏かもしれないけれども、台湾にいけば月給は倍になるし地位も上がっちゃう。奥さん同士のつき合いなんかあったろう。

壇谷 そりゃあるね。なんていったって日本人だけの会社だから、奥さん同士はみんなが知り合いになっちゃう。うちの親父は幹部だったから、幹部のうちへみんなが集まるんだよ。それでいろんな遊びを自分たちでつくるんだ。奥さん連中が仮装舞踏会みたいなのをやってみたりね。うちのおふくろなんかたえず部下の細君を集めてなんかやって、とても遊び好きだったね。

大岡 きみがなかなかハイカラな生活を送ってきているってことが、聞いとるとわかるな。おれんとはそんなものではなかった。だいたいコジキになんか金なぞやる必要はない、あいつらは心がけが悪い連中だから、ああやっておっこちてコジキになってるんだから、というわけだ。つまりうちが貧乏なもんだから、なるべく金を出さないように理屈をつける。そのへんもちがうし、仮装舞踏会なんて、とんでもない話だ。

壇谷 いや、豊かではなくて、植民地の特権なんだよ。おれの親父は甘蔗を耕作するほうの親玉だったので、部下がたたくさんいたから、おふくろがみんなを集めて仮装行列もできたんだよ。

大岡 きみは大きくなって芝居をやるけれども、芝居の雰囲気は初めっからうちにあったんだな。

壇谷 そう、おふくろがそういうお祭り騒ぎが好きで芝居っ気もあった。おふくろはおなかにへのへのもへじを書いて衣紋掛けを肩に通して踊りに出てきたりして、たえずそういう遊び好きだったからね。だからそういうのは子ど

ものときから身についたものかもしれない。姉が音楽学校にいきたくなったり、おれが芝居やったりしたのは、自然そういうところから出てきたのかもしれないね。

大岡 きみには『死霊』という、とにかく一つの作品にくらいついてやることもあるけれども、片方には映画とか悪魔学なんていう遊びがあるよね。おれのほうにはそれがないんだ。

壇谷 さかに貧乏を強調するけれども、しかし、そっちも急に大金持になっちゃうんじゃないの。

大岡 そこでなんとなく、ちぐはぐになっちゃう。いや、貧乏といっても、父親が蒸発なんかしちゃって捨てられちゃったような子どもがいるってことは、知っていたよ。そのうちにいったら、部屋の隅に布団が重ねてあって裸枕がおいてあるだけだったしね。おれんところは株屋の下っ端で、しょっちゅう儲けたり損したりしていたけれど、とにかく枕にはカバーがかかり、布団にはシーツがあるということだったから、うちは貧乏だと思ったけれども、下があるなと気づいていたよ。

学校では忠君愛国教育、御真影教育ってものが小学校時代にあったけれども、また、大逆事件があったあとの大正という時代は、東京では、考えてみるとわりあい明るく明るくということを考えてたらしい。たとえば百貨店などでも元禄模様なんてものをはやらせようとしたりといううなことね。帝劇ができ、女形のかわりに女優劇ができる、浅草でオペラをやる、なんてね。台湾なんかどういふうなぐあいだったの？

壇谷 台湾は、さっきいったように、二重社会でね、台湾人に対しては閉鎖社会だが、日本人同士は固まって、とにかく遊びごとがないから、お互いのうちへやたらに集まるんだよ。その中ではほんとに開放社会でね、東京みたいに隣が何をしているか知らないというんじゃない。みんな同じ工場で知り合っているんだから、いったりきたり、非常に自由な共同社会なんだね。おふくろが仮装舞踏会をやって人を集めるのと同じように、ぼくのそこには絵本とか本があるからほかの子どもがみんなぼくの部屋に集まって、勝手に寝そべって見ているんだよ。表から入るやつもあれ